

美術専攻 版画研究領域

フジイ ハルコ

藤井 晴子



黒い目のカマキリ / document / scroll / contour

手漉き紙、コラグラフ / 手漉き紙、モノタイプ / 手漉き紙 / 手漉き紙

黒い目のカマキリ/document/scroll/contour

情報化された社会において、人との距離は限りなく近くにあるように見えるが、その一方で本当の手触りは失われつつある。私たちは常に他者と容易に接続できるが、その関係は触覚や実体感を伴わない別の形へと変質し、情報を通して認識された像として知覚されるようになった。その結果、他者の実体だけでなく、自分自身の輪郭さえも捉えにくくなっているのではないだろうか。

本シリーズでは、こうした情報化によって変質した人と人の距離や自己認識の在り方を、版画という間接的な技法の構造と、紙漉きによる触覚的な表現を通して考察している。版画は物質として確かに存在するが、そこに現れる像は実体そのものではなく、一度隔てられ写し取られた痕跡として立ち現れる表現である。この間接性に、情報を介して人や世界を認識する現代の感覚を重ねている。多くの作品の中で繰り返し用いているチューリップのモチーフは、幼少期に与えられた個人的な記号である。名札や靴箱に記されていたこのマークは、外部から与えられた記号でありながら、自分自身を認識するための最初の輪郭として、身体の記憶に結びついている。そして情報化で距離感が歪む現代において、揺らぎ続ける自己を支える確かな感覚として私の中に残り続けている。

コラグラフによる図像では、人の像の輪郭を曖昧にし、個体の境界が不確かになる表現を通して、他者との距離が縮まった情報社会において、近づくほどに像が単純化され、かえって実体が掴めなくなる関係性を示している。モノタイプでは、反復するように刷られた像が一見すると同一に見えるが、実際には異なる過程のもとで生じた痕跡である。この差異は、接続されながらも重ならない他者との距離を可視化している。また紙による制作行為は、実体に触れる経験や身体的な感覚を呼び戻す試みであると同時に、現在の環境において切断されつつある身体と世界との関係を再構築する試みでもある。

現代の距離の感覚を起点に、失われつつある距離の感覚の歪みを露呈させる。人と人、自己と世界との関係が、実体ではなく情報の層によって成り立っていること、そしてその近さの中で自己や他者の輪郭がどのように揺らいでいるのかを問いかけている。